

顕浄土真実行文類二(九)

高田短期大学名誉教授 栗原廣海

一、平等の成仏道

前回は、念仏は行者が修する自力の行ではなく、阿弥陀如来が本願力をもって、自らの徳を衆生にふり向け、救うはたらきであるから「不回向の行」と名づけるとされていることについて考えました。それが、

明らかに知んぬ、これ凡聖自力の行に非ず。ゆえに不回向の行と名づくるなり。

という御自釈でした。この御自釈はさらに次のように続きます。

大小の聖人、重軽の悪人、みな同じく齊しく選択大宝海に帰して念仏成仏すべし。

(大乘の聖者も小乗の聖者も、重い罪の悪人

も軽い罪の悪人も、みな同じように等しく、仏が選びぬかれた広大な宝の海のような本願に帰し、念仏して成仏すべきである)

念仏が自力の行であれば、仮にそれによって徳を積むことができたとしても、人にはさまざまの違いがあります。聖人とと言われる人でも大乘と小乗では違ふとされますし、重い罪を背負った人もいればそうでない人もいます。これらの人が修する行は当然同じではないわけで、得られる証果も同じではありません。しかしそもそも聖人は、

釈迦の遺法ましませど

修すべき有情のなきゆえに

さとりうるもの末法に

一人もあらじとときたまう

『正像末法和讃』顕智本 第五十五首)

と言われるように、今は末法の世であるから、釈尊の教えは伝わっていても、自力の行をまことに修してさとりを得ることのできる者は、一人もないとし、そのような人がたすかる道として、弥

陀大悲の回向の行である念仏をお示しくくださったのでした。あらゆる衆生を平等に救わずにはおかない弥陀大悲の選択の願心が、そして願心成就の無量の功德が「南無阿弥陀仏」という名号に結晶して私どもにとどけられ、それが私の称えるお念仏となつているのです。ですから、聖人が凡夫か、善人か悪人かというような、人間に対する世間的な価値観を超越して、念仏者はともに等しく成仏することができるとです。

このことの明証として、聖人はこの御自釈に続いて、曇鸞大師の『浄土論註』の文を引かれます。

ここをもって『論の註』に曰く、「かの安楽国土は、阿弥陀如来の正覚浄華の化生するところに非ざるることなし。同一に念仏して別の道なきがゆえに」とのたまえり。

(そこで『浄土論註』に言われている。「浄土への往生は、みな阿弥陀如来の清らかなさとり華からの化生でないものはない。それ

は同じ本願の念仏によって生まれるのである)り、他の行によるものではない)

「阿弥陀如来の正覚浄華」、つまり「阿弥陀如来の清らかなさとり華」とは、法蔵菩薩が四十八の誓願を成就して阿弥陀仏となられたときに座しておられた蓮華のことです。すべての衆生の浄土への往生はこの華からの化生であるということ、すべての人が弥陀の本願力によって往生することをあらわしています。そこで、「同一に念仏して別の道なきがゆえに(それは同じ本願の念仏によつて生まれるのであり、他の行によるものではない)」と言われるのです。このことが、私たちが普段から最も親しんでいる「和讃」にも格調高くうたわれています。

如来浄華の聖衆は

正覚のはなより化生して

衆生の願樂ことごとく

すみやかにとく満足す

(阿弥陀仏の清浄な蓮台にまします聖者

たちは、阿弥陀仏がさとりを得られたときと同一の蓮華（同一の念仏）から同じ浄土に生まれ、その願い望むところはすべて、たちまちのうちにかなえられる（『浄土高僧和讃』「天親菩薩」第四首）

深く味わいたい一首です。

二、大行の利益

『浄土論註』の引文に続いて、これまで述べられてきた大行の利益が示されます。

しかれば眞実の行信を獲れば、心に歡喜多きがゆえに、これを歡喜地と名づく。これを初果に喩うることは、初果の聖者なお睡眠し懶墮なれども二十九有に至らず。いかにいわんや十方群生海、この行信に歸命するは攝取して捨てたまわず。ゆえに阿弥陀仏と名づくると。これを他力という。ここをもつて龍樹大士は、「即時入必定」といへり。曇鸞大師は、「入正定聚之数」と云えり。仰いでこれを憑むべし、

専らこれを行ずべきなり。

（こういうわけで、眞実の行と信を得ると、心が大きなよろこびに満たされるので、これを歡喜地と名づけるのである。この位を小乗の最初の位である初果にたとえるのは、この初果の聖者は、たとえ修行中に居眠りするよるな怠け心をおこしても、迷いの生の繰り返しが二十八を超えることはないからである。まして、あらゆる世界のどのような人々も、この行と信にすべてをおまかせすれば、仏は攝取つて決してお捨てにはならない。だからこの仏を阿弥陀仏と名づけるのであり、これを他力と言うのである。そこで龍樹菩薩は「即の時に必定に入る」と言い、曇鸞大師は「正定聚の位に入る」と言っているのである。仰いで弥陀の本願を信じ、もつばら念仏の行を修するべきである）

「眞実の行信を得る」とは、阿弥陀如来の大悲の願とその成就が結晶した「南無阿弥陀仏」を信

じ、称えることですが、そのような身になれば、

心が大きな歡喜に満たされるので、これを「歡喜地」と名づけると言われます。「歡喜地」というのは、大乘の菩薩の修行の階位の一つで、五十二位のうちの第四十一位に当たります。菩薩がこの位に至ると眞理をさとするので、再び退転することなく必ず成仏できることが定まり、歡喜が生ずるということのように名づけられるのです。

この位が「初果」にたとえられます。「初果」とは、小乗の修行者である声聞が、阿羅漢果を目指す修道階位である「四果」の最初の位で、知的な迷いを断じ尽くして初めて聖者の仲間入りをする位であると言われています。この位に至れば、たとえ修行中に居眠りするよるな怠け心をおこしても、迷いの生がその後天界に七生、人界に七生、中有に十四生の合計二十八生を経ればそれ以上に迷いの生を繰り返すことはなく、二十九生目には必ず最高の阿羅漢果を得ることができるので、初果の声聞の心は大きな歡喜に包まれるというの

です。

小乗の行者でも初果に至ることができれば大きなよろこびを得ることができただから、ましてや弥陀の大悲を身に受け、本願の念仏を賜っている身に生じるよろこびが初果の行者のよろこびに劣ることがあるうか、と言うのです。なぜなら、衆生にはたらいて称名念仏の行となり、また信心となる「南無阿弥陀仏」にすべてをうちまかせてゆくととき、そのような人々を阿弥陀如来はすべて、だれ一人捨てることなく撰め取りお救いください、そのようなはたらきを身に受けて得られるよろこびに比べられるよろこびなど、他にはないからです。

このようなはたらきをもった仏を「阿弥陀仏」と名づけるのであり、念仏の衆生を攝取して決して捨てたまわないこの仏の本願力を「他力」と言うのであるとお示しくださいています。

※『浄土高僧和讃』の現代語訳は、前法主殿のご著書『国宝 三帖和讃註解』より引用させていただきました。